

川村義肢株式会社 社長

川村 慶さん

川村義肢の概要

—— まずは、会社の概要からお伺いします。

大東市で義肢や装具を作っております。戦後すぐに私の祖父、川村一人が創業しました。祖父は義肢装具の会社に勤めていましたが、頑張っても報われず、幸せを提供する仕事なのに、働いている我々が幸せにならないのでは、ということで独立したのが始まりです。創業時は、戦後すぐとはいえ義足より装具が主体でした。今は再生医療が進んでいますから手足を切断

される方も減ってきており、売上の大体8%が義肢、義足、義手です。高機能化が進んで1個当たりの単価が高くなっていますが、件数としては減っていますね。

—— 一時南森町に会社があったと伺いました。

祖父が亡くなり、祖母が、この仕事をやるのなら、病院が多い大阪市内に移ったほうがいいと言って、南森町に移りました。当時は、近くに大阪大学医学部附属病院があったり、厚生年金病院、住友病院、関電病院などがありました。父は、それまで大阪府中央児童相談所でカ

ウンセリングの仕事をしていましたが、帰ってきて跡を継ぐと、高度成長の波に乗って大きくなりました。

—— その後1999年に大東市に移られたということですね。

この頃、僕はドイツにいましたが、母が遊びに来て、働いていた義肢装具の工場を案内したところ、こんなすごい会社を見たのに、どうしてうちもこうしようと思わないのかと言われました。会社は高度成長の波に乗ったいいが、建物もばらばらに乱立していましたので、1カ所にまとめようということで、移転先を探した時、父から大東市はどうか



大阪弁護士会

Osaka Bar Association since 1880



と言われました。なぜかと聞くと、大東市は、地域でリハビリテーションをやるということを国内で最初を実現した市なんです。以前から、障がいのあるお子さんを特別支援学校に入れずに、なるべく普通学校に通わせる。障がいのある同級生と一緒にすることによって、同級生も先生もPTAの人も勉強になる。お金がないから工夫した結果ですが、それがよかった。障がいのある方の同級生たちが大人になって、僕らの仕事をすごく愛してくれ、川村義肢が大東に来てくれたとあってすごく喜んでいただいて今があります。今は、川村義肢とパシフィックサプライという2つの会社で大体700人ぐらいの規模になりました。

技術の進歩と 義肢・装具

— 義肢についての技術の進歩ですが、例えばどういうものがありますか。

例えば義肢もAIで自動制御するものがあります。人によって歩き方は違うので、そういう微妙な点はこれまで調整が難しかったのですが、ずっと使うことにより、AIが学習してどんどん体になじんでくる物を作れるようになりました。

— 動きに関してはAIによる進歩が実現されたということですが、外見や感触が皮膚に近いものを作れるようになったともお聞きしています。

はい。私どもでは人工ボディーというものを作っています。これは全身いろんな部位をつくるができます。目、鼻、耳、手、肩、男性



の性器もつくれます。この男性性器というのは、LGBTの方や性同一性障がいの方で、女性として生まれても男性として男性の名前で会社に入って、でもカミングアウトしていない方がおられる。そんな方が、例えば集合研修などで一緒にお風呂に入りますとなった時に困るのですが、そういうことから必要とされる方もいて、これは東京の方で結構需要があります。

—— 指が欠損した方のための指も作られているんですか。

大阪府警に離脱者支援の部署があって、大阪府警さんからの紹介が入ったら非常に安価に作るというプログラムがあります。指がないので組を抜け堅気になろうとしても再就職できない方の社会復帰のために指を作らせていただくことをやっています。就職できなかったらまたそっちに戻っちゃうということは防がなければいけませんからね。

—— 他に新しい技術を応用したものもございますか。

「ゲイトソリューション」という装具があります。これは義肢ではなく、脳卒中などの後遺症で足が麻痺している方のための装具です。義足にはいろいろなメカを入れるスペースがあるので、外国でも作れますが、装具の場合、小さなスペースで高機能なものを作り出さなきゃいけない。特に今、力をいれている装具（上写真参照）は油圧ダンパーが入って、かなりの精度で調整ができるんです。日本の中小企業さんで作っているところがあって、基本オールジャパンで作っています。射出成形の仕方、プラスチックを流し込むやり方も、日本のここできれないという技術を使っていますので、この装具をリリースしてもう20何年になります。どこもまねできないんです。

パラリンピックとの関連

—— 今年は冬のパラリンピックがありました。パラリンピックで活躍されている選手で、川村義肢さんの製品を使われている方がいらっしやると聞いています。

そうですね。一番最初はチェアスキーという、座位で滑走するスキーの競技に関するものを作りました。僕らは目立ちにくい、マシンと選手の間のところを作っているわけです。体に接するところをちゃんとやらないとパフォーマンスを発揮できません。車椅子に乗ってもぶかぶかでは体に力が入らず、うまいこといきません。それをびしっと合わせるようなものを今つくっています。普通のS・M・Lサイズではどうしてもだめで、1ミリ単位で調整してほしいという人がいますので、そういう方はオーダーメイドで、シートだけで40万、50万するようなものをつくり全国から来られています。



大阪弁護士会

Osaka Bar Association since 1880

さきほど言ったチェアスキーの製作で学んだノウハウを使って、今は、ウィルチェアラグビーであるとか車椅子テニス、そういった選手のシートも作らせていただいています。

「諦めなくてもいい」ということ

—— 最初に人を幸せにしたいというお話がありましたが、障がいのある方や体の動きが不自由な方々に対してのメッセージはありますか。

我々の経営理念は、「一人でやることを諦めなくてもいい」ということで、そのための器具を作っています。支援機器を体や生活や人生に合わせる技術はかなり進歩しています。我々が買っていたのはそこなんです。だから、諦めてほしくないんです。まずは我が社に来ていただいて、見ていただき、諦めなくてよかったんだと思ってほしい。年間大体3,000人ぐらい見学者が来ていますので、この会社に来ていただくのが一番分かりやすいと思います。

また、スポーツをやっている人で、道具を使えば夢のように強くなる、うまくなると思い込んでいる人がいますが、道具を使いこなすには自分の体を鍛えなきゃいけない。これはアスリートに限りませんが、道具があれば何でもオーケーというのではありません。我が社のマークは、川村のKですが、上に丸がついています。これは人の頭で、それを斜めに支えている形になります。だから、サービスが悪いと言われるかもしれませんが、自分でやれるとこ

ろはやってください。我々はユーザーがご自身で垂直に立てるようにお支えますということです。

—— 諦めなくてよかったというのは弁護士にも言えますね。体のことは川村義肢で、弁護士は権利関係で助力することができればと思います。



弁護士・弁護士会へのメッセージ

—— 川村さんから、弁護士・弁護士会に期待するところは何でしょうか。

「働き方改革」といいますが、今後はいろいろな働き方を創出していく必要があると思います。例えば弁護士さんの視点でこういう働き方もありますよとか、こういうふうに働いている方もおられますよ、といったことをアドバイスしていただくと僕は非常にありがたいし、そういうアドバイスを

待っている中小企業の社長さんは一応いると思います。

少子高齢化で、高齢者を支える働き手の負担が非常に多くなっていくといいますが、その分、何らかの理由で働くことが嫌な人、ニートの方とか引きこもりの方に何とか働いてもらうようにしたい。ばりばりの熟練工でなければできない仕事、パートさんができる仕事、あるいは知的障がいとか発達障がい、自閉症の方、そういう方でなきゃできない仕事もあります。だから、そういうものを仕分けしてマッチングしていくことをやらなきゃいけないと思います。

あと、障がい者雇用ですが、2%をクリアしていないところは行政処分したほうが良いと思うんです。それを変な罰金でごまかしているのでは、一向に進まないんだと思います。厳罰化するのが良いとは思いませんが、障がい者はよく働き、やめないで、そういうすばらしい人材を適材適所で採用してほしいと思います。

また、子どもを産んで育児休暇が終わってまた働く女性を増やす。そのためには男性の働き方も変えないといけない。奥さんが働けるようにするには男性もやれることはやりましょうということです。そういうケースの相談にも乗っていただくと非常にありがたいと思います。

—— どうもありがとうございました。

（インタビュー：大久保康弘
写真撮影：高広信之）